

大恋愛をお約束します!?

M a i c h i H a y a t o

広瀬もりの

Morino Hirose

Eternity



エタニティ文庫

目次

大恋愛をお約束します!?

5

ひみつの隠れ家にご一緒します!?

279

大恋愛をお約束します!?

1

昼下がりのオフィスビル、十五階フロア。

細く開けた窓から吹き込む心地よい涼風に頬をくすぐられていると、知らないうちにまぶたが重くなってくる。

——いやいや、今は仕事中。そんなことを言っている場合じゃない。

お客様と向かい合って座るソファの、相手から死角になってるテーブルの下で、私は自分のふくらはぎの裏を軽くつねって気合いを入れた。

そして、目の前のお客様へと視線をしっかりと合わせる。ただ今、面談中なのはケバケバの化粧おぼけ……もとい、元の顔が想像できないほどぼつちりメイクの若い女性。

彼女は昨夜お見合いしたばかりの相手の男性とのことを、ガラガラ、いえ、とても詳細に話続けている。

「……んもう、写真より五歳は老けて見えたしー。正直、あれで課長になれたなんて信じられない。どうせ部下から全然信頼されてないでしょって感じーっ」

鼻にかかった声でけだるそうに報告してくれているのは、作倉モモコさん、二十八歳。最初はどこのキャバクラ嬢が迷い込んだのかとびびったけど、この方は真正正銘、当結婚相談所の正規会員だ。

頬にかかる嫌みなくらい気合いの入った巻き髪、実際の二倍は大きく見せているであろう目。ここまで接近するとちよつと怖いかも。

心の中でそう呟きつつも、私は神妙な面持ちで領きながら、所定の聞き取り用紙に要点を書き込んでいく。途中で何度も口を挟みたくなるけど我慢我慢。気が済むまで言いたいことを話してもらうのも、私に課せられた大切な業務のひとつだ。

「話だって弾まないしーっ、退屈すぎて死んじやいそうだった。挙げ句に、あれは何？ 食事代は原則として割り勘って聞いてはいたけど、まさか一円単位で折半させられるなんてあり得ない。あんな奴、百年かかったって相手決まらないから。あーっ、だからー アタシが言いたいのは……」

そこで軽快な着信音が鳴り出す。

もちろん、目の前の彼女は当然のように通話ボタンをプッシュ。

「あ、サヤカ!? うん、元気イー? そうそ、聞いてよ聞いてエー……」

……ええと、お客様。よろしいでしょうか?

そのまま、面談中だったことなんて、まるっきり忘れちゃったみたいに電話に没頭し

ている。たった今、私に話してくれた内容にさらに大幅な脚色を加えている辺りがすごい。

——ま、いいか。話はだいたいつかめたし。

私は口元に浮かべた営業スマイルをそのままに保ちながら、テーブルの上の資料を片付け始める。そして空っぽになったカップを交換するために席を立とうとした時、くるくる巻き髪さんの電話が終わった。

「うふ、これから予定がでちゃいました。そんなわけで、今日はこの辺で。じゃあ、失礼しまーす！」

それだけ言うと、彼女はお財布も入らないんじゃないかと心配になるくらい小さなブランドバッグを手にして立ち上がる。キラキラ虹色に輝く爪には、さらにラメやストーンがてんこ盛り。スカートは下着が見えそうなくらい短くってレーシー。ここまで完璧にされちゃうと、突っ込みどころがない感じだ。

「はい、では次回のご来店をお待ちしております。本日はお疲れ様でした」

ドアの外までお見送りして、こちらも任務終了。彼女がエレベーターのドアの向こうに消えた瞬間、はあっと大きな溜息ためいきが出た。

宮内麻衣みやうち まい、二十四歳、独身。結婚相談所「ローズマリー」東東京支店のお客様アドバイザー。と、言ってもまだ駆け出しもいいところだけど。
ひがしとうきょう

新卒で入った会社が、わずか二年後には同系列の会社に吸収合併されちゃって、その際の大量リストラで見事はね出されてしまった。なかなか再就職の口も見つからず途方に暮れていたところ、ここの支店長をしている叔母さんが拾ってくれたんだよね。それがひと月ほど前のこと。

とにかく仕事内容がどうか言ってられる状況じゃなかった。田舎に戻らずに東京でひとり暮らしを続けるためには、先立つものがどうしても必要だったから。だから叔母さんの誘いにふたつ返事で飛びついていった。

すぐに本店研修に行かされて、仕事を一から叩き込まれた。そして、めでたくここに配属されたのがわずか一週間前なの。夏の初めからの約三ヶ月で、本当にめまぐるしすぎるほど環境が変化したわ。

「……ま、いいか。この辺で一息入れようっと」

フロアに誰もいないのをいいことに、私は両手を高く上げて伸びをした。

相手の話にただ相づちを打っているだけで、どうしてこんなに疲れるんだろう。叔母さんの言葉を借りれば「まだまだ修行が足りない」ってことになるのかな。そりゃあね、この道二十数年のベテランと比べられても困るって。

それに、叔母さんにはさらにほかの人にはない特別な「能力」がある。比類なき洞察力——生涯のパートナーを求める人をひとめ見たとたん、その人にぴったりの相手のイ

メージがパパーッと閃^{ひらめ}くんだって。

そんなの絶対にあり得ないって思う？　ところが驚くなかれ、今まで叔母さんが誕生させた何百組もの幸せなカップルが、そのことをはっきり証明してくれているわ。

——まあ血の繋がった姪っ子だからって理由だけで、私とその特殊能力を受け継いでいるはずもないんだけど。

それどころか、未だにこの仕事のどこにやりがいを見いだしたらいいのか、悩み続けるばかりの毎日よ。ひとり面談しただけでこの疲労感、本当にこの先やっていけるのかしら。パソコン画面を睨^{にら}みつけながら黙々とデータ解析していた前の職場の方が、よっぽど性に合ってたと思う。

私は受付カウンターの奥にあるコーナーで、いそいそとマイカップを取り出す。えーい、いつものコーヒーマーカーじゃなくて、秘蔵のエスプレッソマシーンを使っちゃえ。専用のカートリッジをセットすると、すぐに辺りに漂い出す香り。何とも言えない芳^{かぐわ}しさにうっとりしながら、私は店内をぐるりと見渡した。

オフィスビルの一角に店舗を構えるここは、叔母さんの「お城」。恵まれた立地条件が功を奏して、こんな風に平日の昼間でも暇を持て余さない程度にお客様にご来店いただける。

いかにもそれっぽい外装じゃないのいいみたいで、全面ガラス張りで明るい雰囲気

はパツと見はエステサロンを連想させる。ここの支店は際だって女性会員が多いというのも頷けるわ。地上十五階から見下ろす都心の風景も最高だし、テーブルや柵にはグリーンや花がさりげなく置かれていてリラクゼーション効果もありそう。

気軽に足を運んでもらうことが一番大切だものね、そういうところもよく計算されているなあと思う。

小さな店舗だからと、忙しい時間帯だけ他店から応援を頼む程度で、今までずっと基本的には叔母さんひとりだけで切り盛りしてたって話。それを最初に聞かされた時は、本当に驚いた。正社員として私を雇う話がふたつ返事で上からOKされたのも当然よ。

とにかく、今日も五時までは私がひとりで頑張らなくちゃならない。この先も一時間おきに三件の予約が入っている。うー、大変っ！

え、肝心のその叔母さんはどこに行ったかつて？

実はこの店舗の支店長である彼女は、一昨日から二泊三日のグルメツアーに出かけている。私が一通りの仕事を覚えたから、この辺で命の洗濯をしたいとか言って、自分ひとりでさっさと年休を取ってしまった。

まあね、このところ数ヶ月は忙しすぎて一日の休みもなく頑張ってたっていうから、ちよつとはご褒美あげなくちゃかな。姪っ子を頼りにしてくれてると思えば、少し嬉しくもある。

けどなー、何度かこっちからメールで仕事の報告をしても返信はまったくなし。思い余って電話してもいつも圏外。いくら暇な平日の日中って言っても、新人の私ひとりでは対処しきれないことだって十分起こり得るのに。ま、こんな不安な気持ちで過ごすのも残すところあと半日だと思えば、どうにか乗り越えられるかな。

そう思いつつ、淹れたてのエスプレッソを手に定位置の受付カウンターに戻ると、タイミングよく携帯が鳴り出した。ディスプレイには叔母さんのフルネーム「前田亜希子」という名前が表示されている。

「あーっ、叔母さん！ もうっ、何度連絡したと思ってるの！」

私が噛みつくように言うと、叔母さんはいつも通りの能天気さでカラカラと笑う。

『あらあ、麻衣ちゃん！ そんなに怒ると顔のシワが増えるわよー。いつもスマイル、スマイル。それが若さを保つ秘訣だって言ってるでしょう』

開口一番コレだもんな、もう参っちゃう。

『どう、そっちは上手くやってる？ 私？ ええ、もう絶好調！ こんなにハッピーでいいのかしらって、ずーっと思ってるわ』

元気いっぱいあきの声を遮って、私は先ほどのお客様についての報告を。本来は叔母さんが担当する会員さんあきだもの、きちんと説明しておかなくちゃ。

「……というわけでした。いいんだけどね、その前に先方からも断りの連絡が来てたし。

うん、もちろんそのことは女性側にはお伝えしてないわ。大丈夫よ、私だってそれくらいはわかってるって」

報告とか言って、本当はただ愚痴を吐き出したかっただけなのかも。それくらいのことは、電話の向こうの叔母さんも十分わかってるみたい。

『そう、ならいいけど。麻衣ちゃんはすぐ顔に出るから心配だわー。もちろん多少のことなら私があとからフォローすることも可能だけど、くれぐれも慎重にね』

言ってくれるなあー、でも当たってるから仕方ないね。今回も途中で何度かプチッとキレそうになったし。

「はーい、わかってますって。気をつけます」

実は、会員さんとさっきのように個人面談をするのも、まだ両手で数えられるくらい。相手は大切なお客様だから、とにかく我慢我慢で話を最後まで聞かなくちゃっていうのはわかっていても、毎回すごいストレス。先ほどの方も、こっちの怒りの警戒水位を超える前に切り上げてくれて、本当に助かった。

とにかく場数を踏むしかないんだろな、最初から完璧にできる人なんていないんだから。まずは上手にやろうなんて思わないで、基本をしっかり押さえていきたい。

『頼んだわよ、麻衣ちゃんだけが頼りなんだから』

そこで、電話越しに誰かが叔母さんのことを呼ぶ声が聞こえてきた。それに「はい」

と返事をしたあとで、叔母さんの声がさらに一オクターブ跳ね上がる。

『と・こ・ろ・で・っ、実はね、今日は麻衣ちゃんにびっくりなお知らせがあるの!』
その時、何かすごく悪い予感がしたのよね。いつもはそんなに鋭い方じゃないんだけど、その瞬間だけ「野生の勘」が働いたって感じ?

叔母さんは携帯の向こう側で一度大きく深呼吸をすると、声も高らかに言い放った。

『あのねっ、私とうとう運命の彼に出会っちゃったの! だから、これからふたりでハネムーンに出かけてきま〜す! あとのことは佐藤チーフに頼んでおくから、麻衣ちゃんも彼女と一緒に頑張つてね。じゃ、そろそろ搭乗手続きが始まるから切るわ、また連絡するわね!』

「え? ……ちょ、ちょっと待って! 叔母さんっ、叔母さん——!」

言いたいことだけ言つて、さっさと切れた電話。私は携帯を握りしめたまま、しばらく呆然と**ぼうぜん**その場に立ち尽くしていた。

——これって、どういうこと? まさか、手の込んだ冗談とかじゃないよね。

数分後、ようやく頭が回転するようになって、私は初めて自分が今どんなに大変な状況に置かれているかを悟った。

そもそもこの支店は、叔母さんの力で成り立っているようなもの。雑居ビルのテナン

トのひとつ、ごくごく小さな店舗ではあるけれど、これだけの会員を抱えて繁盛しているのは、彼女の神業のお陰。それは研修中にも嫌と言うほど思い知っていた。

それなのに、大切な仕事を放り出して、ハ、ハネムーンなんて……。そんなのって絶対にあり得ないから……！

改めてその事実気づいた時、マジで身体中から血の気が引いたわ。叔母さんがなくて、この支店はこの先大丈夫？ また働き口がなくなつて職探なんてやだ。ようやく再就職できたとホッとしてたんだから、それだけは勘弁して……！

落ち着け落ち着けと自分に何度も言い聞かせながら、座り心地のいい椅子に腰を下ろす。そしてまだ湯気の立っているエスプレッソに口をつけたけど、何の味も感じなくなつた。あー、ホントにどうなつちやうの。

やーっ、完全に混乱してる。どうしよう、本当にこの先どうしようっ……！
しかし、そんな物思いも、それほど長くは続かなかった。

ガラス張りのドアの向こうにふっと人影が見えて、私は慌てて姿勢を正す。

「いらっしやいませ！」

自動ドアが開いた瞬間に、私は反射的に立ち上がって頭を下げた。明るく、そして上品に。挨拶あいさつの基本はきちんとできたと信じたい。

そうよ、いくら気が動転してたってね、それくらいは社会人として当然のことだから。

まずは目の前の仕事を着実にこなさなくちゃ。

「え……ええと、こんにちは」

顔を上げると、迎いをきよきよと見渡している男性がいた。年齢は二十代後半から三十代前半？ 身長は高くてすらつとしていて、でも貧弱じゃなくほどよく鍛え上げられている感じ。……しかもっ、かなり格好いい……！ 涼しげな目元も、揺るぎない自信を感じさせる口元も、最高に決まってる。

やだーっ、ほんの数秒の間にいろんなことをチェックしちゃうなんて、これって職業病かな。どうも次に予約されている方とは別人のようだ。

だから、確信をもってにこやかに訊ねてみる。

「初めてのご来店でしょうか？」

新規の方がお見えになるのは私がここをひとりで任されてからは初めてのことだ。でも叔母さんが対応しているのを隣で見えていたから、一通りのやり方はわかつている。

彼がおずおずと頷くうなずのを見て、私はとびきりの笑顔で記入用紙を差し出した。

「どうぞおかけください。まずはこちらの用紙に必要事項のご記入をお願いします」
その言葉に、彼は怪訝けげんな表情になってあとずさり。

「え……でも、自分は」

あ、わかる。そうだよ、こういう場所ってどうしても緊張するもの。だから接客は

努めて明るく、お客様の不安を取り払ってあげなくちゃ。

そうよ、叔母さんがいつ帰ってくるのかわからない今、新規の会員さんは喉から手が出るほど欲しい。しかも見た目も限りなく優良物件、逃す手はないでしょう。

「当店では正式にご入会いただく前に、一定のお試し期間を設けております。本日こちらにご記入されましたも、即手続きに入るということはございませんので、どうぞご安心くださいませ。今回ただくデータを登録会員様のものと照合して、お客様にぴったりのお相手を選び出すまでのプロセスをご紹介します。その上でご入会に関するご質問やご不明な点にもお答えして参りますので、何なりとお申し付けくださいませ。そこま

で、すべて無料のカウンセリングとなります」
お、嘸^{せりふ}まずにマニュアルどおりの台詞を言い終えることができた。よしよし、ここまでは上出来。

お客様が首を捻^{ひね}りながらも席についてペンを手にしたのを確認してから、私はコーヒ―を淹^いれるために席を外す。

——ふうん、あんな素敵な人が結婚相談所に来たりするんだな。

コーヒーマーカーをセットしたあとで、真剣な横顔をこっそり盗み見してしまう。

あのルックスなら、どう考えても社内ではモテモテ間違いない。同じフロアの女性社員があつという間に群がってきそう。誰もが夢見るような出会いをすぐに手に入れら

れそんな人が、どうしてこんな打算的なやり方を選ぶかな。ちよつとがっかり。

そこで思わず落胆の溜息ためいきをつきそうになって——慌おわてて口元を片手で覆おったわ。

……うん、そうなの。叔母さんには申し訳ないけど、私自身はこういう形での出会いが好きじゃない。人それぞれ価値観があるし、他人のそれを否定するつもりはないわ。でも少なくとも私は、運命の出会いを自力でゲットしたいと思ってるんだ。

そりゃあね、ある日突然、白馬に乗った王子様が目の前に現れるとか夢物語を信じてるわけじゃない。でも最初から身長とか年収とかその他もろもろの条件をつけてターゲットを絞しぼってしまふって、ちよつと違う気がする。

もしかしたらコンピュータが希望条件に合わないからとふるい落としてしまった中に、本当の運命の相手がいたかも知れないんだよ。それって、すぐもったいないじゃない？

——ま、いいか。私の個人的な考えをほかの人にまで押しつける必要なんてどこにもないんだもの。せつかく鴨かもが葱ねぎを背負しょってきてくれたんだから、このチャンス逃には駄目。

「どうぞ、カップが熱くなっておりますのでお気をつけくださいませ。お砂糖とミルクはこちらです」

彼はすぐにこちらを振り向いて「ありがとう」と笑顔で応えてくれた。

うーん、この表情も素敵だわ。やっぱりこんなのもったいないーとかまだ考えていた

りして、もしかして私ってしつこすぎ?

そんなことを考えていたら、彼が再び顔を上げた。

「……ええと、ちょっとよろしいでしょうか」

やわらかな微笑みが自分に向けられると、胸をぎゅっと掴つかまれた気分になる。思わずクラクラッときそうになって、次の瞬間にハッと我に返った。

やだな、いつもはこんなに惚ほれっぽくないはずなのに。今日の私、どうかしてる。

「こちらの『年収』の欄ですが、正確な数字が必要ですか?」

空欄にしてあった箇所を指さして、彼が言う。すぐに質問に答えなくてはならないのに、綺麗な指先についつい見とれてしまっていた。

「あ、今回はだいたいで構いません。隣にチェック欄がありますから、これくらいかなと思われるところに印をつけていただければ」

その時に見ちゃったんだ、彼が迷いもなく一番下の「千五百万以上」の欄にチェックを入れているの。ふうん、やっぱりお金持ちなんだ。だよなあ、触り心地のよさそうなスーツとかピカピカに磨き込まれた革靴とか、見るからに高級そう。腕時計だって、当然ながら某有名海外ブランドのそれだ。

それからまたしばらくの間、沈黙の時間が流れていく。次の予約の方の資料を揃えながらも、彼の方ばかりが気になって何度も何度も振り向いてしまう。

もうっ、駄目だなあ、私。ばっちり好みのタイプではあるけれど、これじゃ公私混同もいいとこだわ。

「今日は、こちらのオーナーがお見えになりませんね」

記入用紙の八割方を埋め終えたところで、彼は再び顔を上げた。

「はい、あいにく支店長の前田は本日年休を取っております。……何かお言付けことづがございますか？」

そこまで言いかけて、急に不安になってきた。

今までずっと新規のお客様だとばかり思っていたけど、この方って叔母さんの知り合い!? いや、違うよね。全然そうじゃないって、そう言つて!

「いえ、言付けといますか……先日、こちらの自動ドアの件でご連絡をいただいたので、確認に来たのですが。その話はあなたでもわかりますか？」

彼の顔を見つめたまま、固まってしまった私。

ちよ、ちょっと待つてっ!? やっぱり、この人ってお客様じゃなくて——

「ご挨拶あいさつが遅れました。自分はこのビルのオーナーで須藤すどうと申します」

今度こそ、頭が真っ白。すつと立ち上がって名刺を差し出されたんだけど、腕が震えて上手く受け取れない。

「それで、具合の悪いドアというのは——」

どんどん話を進めていく彼に対し、完全に置き去りにされてしまった私。

え、え……ビルのオーナーってことは。その……もしかして、もしかなくてもこの方って来店されたお客様じゃなかったの。

うわー、これって痛恨のミス!?

「すっ、すみません！ 本当につ、申し訳ございませんでした……!」

ひーっ、どうしたらいいの！ もうっ、やだやだっ、自動ドアの点検？ そんなの、一言も聞いてなかったよ。

慌てて頭を下げまくる私に対し、彼は少しも変わらないやわらかな物腰で答えてくれる。

「あ、いえ。どうかお気になさらないでください、すぐにご説明しなかった僕の方にも責任がありますし」

そんないいんです、優しく許^{ゆる}してください。素敵に微笑まれても、今はさすがにときめけないよ……

「あ、たぶんこのドアですね。なるほど、確かに動きがよくない。すぐに修理に来てもらえるよう、手配しましょう」

そこでタイミングよく携帯が鳴り出す。「ちよつと失礼」と断ってから通話ボタンを押した彼は、短いやりとりのあとでこちらに振り向いた。

「では、オーナーよろしくお伝えください。コーヒーをご馳走様」
滑りのよくない自動ドアが開いて閉じて。素通しのドアの向こう、広い背中がエレベーターホールへ消えていくまで、私は呆然と^{ぼうぜん}その場に立ち尽くしていた。

2

もーっ、信じられない！ どうして最初にきちんと確認しなかったんだろう。こんな
のって接客の基本中の基本だよ。

もちろんすぐに叔母さんに連絡してみた。でも何度かけ直しても『おかけになった電話番号は……』という非情なメッセージが流れるばかり。

仕方ないから、今度はいつも夕方から助っ人に入ってくれてる佐藤チーフに泣き付いてしまった。日中は本社の総務にすることが多い彼女は、ちようど手が空いてたからと話を聞いてくれる。

『あらー、そのことは支店長から直接言付かっているとおばかり思ってたの。ごめんなさいね、私の伝達ミスだわ。でも、須藤オーナーを新規のお客様と間違えるなんて、普通だったらあり得ないわよー。いかにも麻衣ちゃんらしいわ』

そう言いつつ笑いを堪^{こら}えているのが、携帯越しにも丸わかり。

人の大失態をそんな風に軽々しく片付けないで欲しいな。仮にもあちらは、このビルを所有している「大家さん」。あまりに失礼なことをしたら、即刻立ち退きを要求されちゃうかもしれない。そうなったって、こっちは文句も言えない立場なんだから。

『ふふふ、でも彼つてとつても格好よかったでしょう？　もしかして、麻衣ちゃんの好みかしら。思わずときめいちゃったりした？』

……あのー、佐藤チーフ。そういう問題ではないと思うんですけどっ。

『彼、半月前にアメリカから戻ってきたばかりなのよ。前オーナーのお父様から不動産を引き継いで、とても頑張ってるの。若いのにあれでなかなかのやり手みたい。そうか、この間ご挨拶^{あいさつ}に見えた時は麻衣ちゃん、まだ本店で研修中だったものね。今日が初顔合わせだったってわけか』

仕事の邪魔をしては申し訳ないと早々に電話を切ったものの、こっちはフラストレーションが溜^たまりまくり。しかも、叔母さんのこともとうとう言えずじまいだったし。

とりあえずそのあとの面談もきちんとこなしたけど、お客様と会話を続けつつも頭の中では違うことばかり考えてた。

そして五時。待ちに待った佐藤チーフが出勤して、ホッと一息。

「麻衣ちゃん、お疲れ様。いろいろ大変だったみたいね」

「そうなんですよ、チーフ。しかも、叔母さんが……!」

よく考えたら、そっちを先に報告しなくちゃだったのね。さっきの電話ではすっかり気が動転していて、どこかに飛んで行ってしまってたみたい。

泣き付く私に彼女は苦笑い。

「何かね、見えちゃったみたいよ、赤い糸」

あ、よかった。叔母さん、佐藤チーフの方にもちゃんと連絡入れてたんだ。そうだなあ、こんなことを私からの伝言で済ませたら、あまりに失礼なもの。一から説明しなくちゃならないのかと思ってたから、すごくホッとした。

「まあ、支店長も長年の夢が叶ったんだし、これはもう仕方のないことでしょう。本部にも話を通したから、しばらくは私もここにフルで入れると思うわ。今後のスケジュールを考えると、もうひとりくらい助っ人が欲しいところね。それも上を通して検討するわ」

さすが、ベテランアドバイザーの彼女は頼りになる。佐藤チーフが籍を置いているのは本店だけど、随時手薄な支店に助っ人に入っているんだって。その豊富な経験を活かして、どんな状況にも臨機応変に対応してくれるから本当に有り難い。

この人が我が道を突き進む叔母さんを上手に操作してくれたから、ここまでやってこられたんだよね、きつと。ひとりでいる時は不安で不安で仕方なかった私も、佐藤チー

フの余裕な笑顔を見ていると次第に気持ちが悪く落ちてくる。

しかも、その時の私の頭のほとんどを占めていた「ビルオーナー相手にまさかの失態」の一件を華麗にスルーしてくれて、こういう心遣いもさすがだなと思う。

「そうですね。かなり驚きましたけど、ある意味叔母さん、いえ支店長っぽいっていか……」

勤務時間内は役職名で呼ぶようにと言われていたんだけど、ついついいつもの癖が出ちゃう。慣れないうちは仕方ないと大目に見られているものの、そろそろきちんとできないとヤバイかも。

でも、考えれば考えるほど謎。出会ってすぐにハネムーンってどういうこと？ 搭乗手続きとか言ってたけど、それって間違いなく飛行機だよね。いったいどこまで飛んでっちゃうつもり？

叔母さんのやることって、本当に意味不明で理解に苦しむなあ。

「麻衣ちゃんも、今までよりも仕事のスケジュールがタイトになることは覚悟しておいて。この先しばらくは、ほとんど年休も取れなくなると思うわ」

そういう状況になることは、叔母さんから電話をもらった時点である程度は腹をくくってた。

「まあ、今日のところは急ぎの仕事もないし、もう上がっていいわ。あとのことは私に

任せておいて。今日は本当に疲れたでしょう」

そこで佐藤チーフはウインクひとつ。余計なことを言わずに済ませてくれる辺り、本当に人間ができてゐるなあつて思う。

今日は有り難く、お言葉に甘えよう。また明日一日も頑張つて乗り切るために、ゆつくりと身体と気持ちを休めなくちゃ。まだまだ不安は尽きないけど、大変な事態がもし起こったらその時、改めて考えたらいいんだし。

「あ、ありがとうございますっ！」

連絡事項を伝え終えて、私は裏の従業員スペースに向かう。

「ローズマリー」の所員用制服は、淡いピンクの上下。中に着るブラウスは自前で、白ならば何でもいいことになつてゐる。今日私が着ているのは襟元えりもとにリボン結びのボウタイが付いたもの。ちよつと清楚でお嬢様風かなと思つてゐるんだけど、どうかな。

かつちりした服装からキャミワンピに着替えると、本来の自分に戻つた気がする。今日は少し肌寒いから、上にレーシーな上着を羽織つてみた。うんうん、これなら昼間面談した彼女の十倍は好感度が高いと思うんだけどなーっ。

……いけない、こんな風に考えてたら性格悪くなっちゃう。

この業界に入つてから、研修期間を含めてもまだひと月。でも短い時間の中で、今までの人生では考えられないくらい、いろいろな人間に会つてきた。みんな「出会い」を

求めているけど具体的にどうしたらいいかわからなくて、「プロ」の力を期待してるんだ。中には努力する方向を間違えている人もいたりして、思わず「何だよ、それ」って突っ込みたくなっちゃったり。こんな仕事を何十年も続けている叔母さんには、本当に頭が下がる。だけどそのことを言うと、彼女はこう答えるの。

「これほど素敵な仕事、世界中のどこを探してもほかには見つからないわ」

……きつと私は、どれだけの経験を積み重ねたとしてもそんな心境にはなれないと思う。

そんなことを考えつつ、エレベーターで一階のホールまで下りてきた。そしてエントランスのピカピカに磨き込まれた床の上を一気に通り抜けたところで、不意にうしろから声をかけられる。

「こんばんは。今、お帰りですか？」

どこかで聞いたことのある声だなあ、と何気なく振り向いてびっくり。うわっ、この人って、昼間の——そう、須藤オーナーじゃない……!!

「はっ、はい！ そ、そのっ、……先ほどは大変失礼いたしました……!!」

頼むから、いきなり出てこないでよ。そりゃ、これきり二度と顔を合わせないのは無理だと思ってたけど……

「いえ、こちらこそ。ああ、修理の業者ですが、明日の午前中に来てもらえることになりましたよ。今からご連絡しようと思っただけです。そうしたら、管理人室の窓からあなたの姿が見えて」

相変わらずの低姿勢、物腰がすごくやわらかで好感が持てる。爽やかな笑顔もやっぱり素敵。

「そ、それは、わ、わざわざありがとうございますっ！」

対する私はさっきから台詞を囁きまくり。もうっ、恥ずかしすぎて顔から火が出そうだ。確かこのビルって、エントランスの一角に管理人用のスペースがあったはず。彼はいつもそこにいるのかな、そして私の姿が見えたからわざわざ出てきてくれたとか？

すごいなあ、電話一本で済むことをこんなに丁寧に。テナント側の人間としても感激してしまうわ。

「では、私はこれで……」

うーん、絶対にわかってないよね、私がすごく慌ててるの。

こうしてふたりが会話をしている脇をさっきから帰宅途中の人たちがたくさん通り過ぎていく。みんな、彼の方を振り返っていくんだよ。身長も結構あるし、かなり目を引くルックスだしね。この人がビルのオーナーですごくいいお金持ちだって知らなかったって、見とれてしまうと思う。

「——あ、ちょっと待ってください」

くると背中を向けて歩き出したところで、再び呼び止められる。

「これから何かご予約はありますか？　もしもお暇なら、一緒に食事などいかがでしょう」

え、何で？　って言葉が、喉の奥に貼り付いて止まってしまった。きっと今、すごい変な顔をしていると思う。でもそんな私を見ても、彼の優しい表情は少しも崩れることがない。

「折り入ってお話があるんです、よろしいでしょうか」

思いがけない誘いに驚きすぎて、それってどういうことですかとか訊ねることも忘れていた。何で私がこのビルのオーナーと食事を？　いったい何がどうなってるの!?

彼が予約してくれたレストランは、静かな住宅地の一角にある洋館だった。建物の前には贅沢ぜいたくに作られたバラ園があつて、それだけでも見応えはたつぷり。しかも夜間である今は、その庭が間接照明で幻想的にライトアップされている。

普段の生活では絶対に足を踏み入れることのないような、とても高級そうな場所だった。

「いらっしやいませ。お待ちしておりました、須藤様」

建物の入り口で待っていたオーナーらしき紳士に、深々と頭を下げられて慌ててしまふ。何だか、場違いすぎない？　こんな普段着で大丈夫なのかな。

「さあ、行きましょう。……ええと」

どうしても店内に入ることができなくて立ち尽くしていた私を、振り返った彼が呼ぶ。そこにきてお互い初めて気づく。そうだ、私ってまだこの人に名乗ってなかったんだ！

「あ、……私、宮内と申します」

やばーっ、ご来店くださったお客様には最初に自分の名前を伝えるようにと言われていたのにつ。今日はもう、何もかもがマナー違反でどうしようもない。

塩をかけられたナメクジみたいになびていく私に、彼は静かに微笑んでくれた。

「宮内さん。ここは僕の馴染みの店ですから、遠慮なさらずにどうぞ」

そうは言われてもね、やっぱり緊張して身体が上手く動かない。もしかして今の私、右手と右足が一緒に出てない？　ガラスに映る姿が、ロボットみたいにガクガクしてる。一番奥のテーブルで、私の到着を静かに待っていた先ほどの紳士が椅子を引いてくれた。こんなの初めて。ううん、何もかもが慣れてなくておっかなびっくりだ。

「この料理は何でも美味しいから、おまかせのコースでいいでしょうか。宮内さんは、何か苦手なものがありますか？」

私が小さく首を横に振ると、彼はまたにっこり微笑む。

「ではそれで」

メニューを受け取ると、紳士は静かに席を外す。その時になってようやく店内の様子を確認することができたけど、何と言うか……すべてが上品すぎて身の置き場がない。だって、ここに到着するまでだって大変だったんだよ。

帰り支度を終えた彼とビルの外に出ると、そこには黒塗りの車が待っていた。運転席から降りてきた男性が、当然のように後部座席のドアを開けてくれて。いったい何ごとかと思ったら、これが彼専用の車だって言うじゃない。えーっ、運転手つきの車って……！
どんだけ？

勧められるままに乗り込んだんだけど、座席は座り心地抜群で走り出してもほとんど振動を感じない。ということとは、かなりの高級車なんだよね？ 正真正銘のお坊ちゃまって、こんなすごい車に当たり前のように乗っているんだと感心させられてしまう。すぐに彼の携帯が鳴り出して、車の中ではずっと通話中。何だか難しそうな内容の会話で、これって聞いちゃまずいんだろうなってドキドキしちゃった。そんなわけで車内でも別の意味で緊張しまくり。

「すみません、突然このような場所に連れ出してしまつて」

私があんまり縮こまっていたからかな、彼もとても恐縮した表情になつてる。

「あ、いいえ、私の方は大丈夫です。……その、確かにちょっと驚きましたけど」

昼間のアレはすべてが私の勘違いで、失礼なことをしたと反省している。もちろん、あのあと記入途中だった用紙はシュレッダーにかけて破棄したし、それでおしまいになるとばかり思ってた。まさか今更、そのことを蒸し返そうとしているんじゃないよね？
だって、そうじゃなかったらつじつまが合わない。

ビルのオーナーとそのテナントの一従業員がディナーテーブルに向かい合っているって、かなり異様な光景だよ。わかってるのかな、この人。

——とは思うものの、こっちからそれを訊ねることなんて絶対に無理……！

「……そうですか、ではこちらに移られてまだ間もないんですね？」

そのあと、相手の真意もわからないままにお互いに軽く自己紹介したりして。私が転職したの駆け出しアドバイザーだったことも、あっさり白状してしまった。

「ええ、ですから先ほどのような失敗も。……本当に、申し訳ございませんでした」

あーっ、自分でもしつこいなあと思うんだけど、須藤さんの顔を見るたびに何度も何度も思い出して恥ずかしくなってしまう。

「いえ、いいんです。こちらとしても、なかなか興味深い体験でしたし」

——そりゃそうでしょうよ。今日みたいなことがなかったら、一生関わることのなかった世界だと思ふもの。

須藤隼人さん、二十八歳、結婚歴なし。実家は不動産管理業を手広く営んでいる地元

の名家。

某有名大学を卒業後に大学院に進み、そこでも続けて経営学を学ぶ。修士課程を終えたのちに渡米、現地の大学でさらに学びつつ複数の業種の企業研修も積極的に受けてきた。

友人の誘いでベンチャー企業の立ち上げに関わるも、半月前に両親の強い希望により帰国。今は家業を継ぐために父親の下で修行中。さらに付け足すなら、趣味は「テニス・スキー・登山」だった。

シュレッダーにかける前に、つつい読んできた略歴。そこに佐藤チーフから聞いた情報もプラスして、ちよつとの間に彼のことにずいぶん詳しくなっている。

本当にこういう人がいるんだな。ドラマや小説の世界ならあり得ても、現実にはないんじゃないかと思ってた。しかもかなりのイケメンで、それなのに本人はそんなことまったく意識してない感じで……

「ようやく日本に戻ってきましたが、何かと慌ただしくてなかなかゆつくりできなかったんです。この店は僕の隠れ家的な場所で、やっと訪れることができてとても嬉しく思っています」

さらに物腰もやわらかで、一緒にいるとすごく大切に扱われているなって幸せな気持ちになれる。もしもこんな人が、パートナー候補として目の前に現れたら、お相手の女

性は目の色が変わっちゃうだろうな。人間的にも完璧で、その上絵に描いたような「玉の輿」。こんなオイシイ話、二度とないと思うもの。

……うーん、そうだなあ。この人にぴったりの相手ってどんな女性だろう。残念ながら私の少ない引き出しでは、すぐにはコレというイメージが浮かばない。

「宮内さんの勤めていらっしゃるお店は、とても評判がいいそうですね。管理会社の社員の間でもよく話題になっているんです。だからいろいろと話を聞いているうちに、一度ぜひ詳しいお話が聞いてみたいと思いました。ようやくその機会が持てて、とても嬉しいですよ」

美味しいワインで乾杯したあとで、綺麗に盛りつけられた前菜が運ばれてきた。丁寧に作られたパテや生ハムに、たっぷりの野菜が添えられている。

「大手チェーンの看板を掲げてはいますが、お店独自のサービスも展開していて、それがとても好評だそうですね」

須藤さんは食事のマナーも完璧。とろとろのソースのかかったリーフはどうやって口に運んだらいいのか悩んでしまったけど、目の前に「お手本」がいてくれて助かった。

「あ、それは叔母さん……いえ支店長の前田の得意技があるからできることなんです」新しいプレートが運ばれてくるタイミングでふと会話が途切れても、まったく気まずさがない。まるで水が高い場所から低い場所へと流れていくように、さらさらとよどみ

なく会話が続いていく。

「へえ、あのオーナーの得意技？ それはとても興味深いですね。具体的にはどのような内容なんですか？」

ゆったりとした手つきでナイフとフォークを扱いながら、彼はさらに質問を投げかけてくる。

「あ……いえ、とりたててお話しするようなことでもないのですが」

この話は研修でお世話になった本店所員の間でも、とても有名だった。私が彼女の姪だってことも知れ渡っていたから、いっぱい質問されて困っちゃったよ。

でも実は、口に出して説明するとても簡単な話になっちゃうんだよね。

「前田には、『千里眼』があるようなんです。本人が言うには、パートナーとなるふたりの間に繋がっている赤い糸がはつきり見えるのだとか。だからその閃きひらめきに従っていれば、まず間違いがないそうなんです」

正確には面談に訪れた会員を前にすると、その人にぴったりの相手のイメージが瞬時に思い浮かぶんだという話。そんなの絶対に嘘だとか思っちゃうけど、実際にその能力は多くの事例で証明されている。

「何でも、幼稚園の頃から『お見合いおばちゃん』だったらしくて。今まで誕生させたカップルは正確にカウントすることはできないくらい多いみたいです」

叔母さんは私の母親の妹に当たる人で、私は生まれた時からずっと叔母さんのことを知っている。いつも笑顔でキラキラしていて、昔からとにかく前向きな明るい人だった。「とても華やかで素敵な方ですよ、僕も初めてお目にかかった時にそう思いました」やっぱ異性の目から見ても、叔母さんは魅力的なんだな。男性会員さんの中にもファンが多いって聞いてたけど、こうやって面と向かって言われると自分のことでもないのにドキドキしちゃう。

「ありがとうございます。でも実はああ見えてかなり口が悪いんですよ。普通の人が遠慮して言わないようなこともズバズバ言うから、それで会員さんが怒って退会されてしまうこともあるとか……ふふ、それも本人が言うには『武勇伝』だそうですけど」

すべてにおいて「熱い」叔母さんは、真面目に出会いを求めている会員さんとはがつつりと向き合う。だから、衝突も多いみたい。今は親にすら本気で叱られたことはないっていう若者も多いから、すぐくびつくりされるみたいだよ。

「へえ……じゃあ僕も今後のお付き合いでは、十分に気をつけていかなければなりませんね」

いえいえ、須藤さんだったら絶対に大丈夫。むしろ好印象だと思うわ。
和やかなおしゃべりが交わされている間にも、次々と料理が運ばれてくる。素材の味を十分に引き立たせるシンプルな味付けで、どれもがとても美味しい。

このテーブルに彼と向かい合って座りたいと思っている女性は、大勢いるんじゃないかな。今夜は偶然私が誘われたわけだけど、ほかにも候補者はたくさんいそう。

——何で、こんなにすべてが素敵なんだろう。これでもうちちょっと普通だったら、私だって……

ナイフを差し込む必要もないくらいやわらかいミニステーキ。ソースの絡み方も完璧だ。自分の心の中に一瞬湧いてきた不思議な感情に驚きながらも、私は小さな一切れを呑み込んだ。

「そちらのお店の『無料カウンセリング』では、どのようなサービスが受けられるのですか？」

須藤さんはとても嬉しそう。ようやく念願の場所で食事ができて、幸せいっぱいって感じだ。

うん、……私の方も幸せ。

料理はどれも絶品だし、サービスは申し分ないし、目の前の男性も好みにばっちり。だけど、……だからこそ、すごく悲しかったりする。

どうして、この人はこんなにうちの業務に興味を示すの？ それってもしかして、やっぱり——

「その……、須藤さんはまさか本当に当店への入会をご希望なのですか？」

だからつい、口が滑っちゃった。こんな台詞、結婚相談所の所員としてはあり得ないよね。でも、どうしても言わずにはいられなかったの。

「は？」

当然ながら、驚いた顔になる須藤さん。やつぱり、もう少し控えめに切り出すべきだったかな。やばいなあとと思ったけど、もう止まらなかった。

「須藤さんなら、他人の力を借りなくても、素敵なお相手を見つけることができるはずです。だから、その努力を惜しまないでください」

特殊能力を持っている叔母さんは、それを自分を頼ってくれるたくさんの人に分け与えている。それで叔母さん本人も相手の方も幸せになれるならそれでいい。

……だけど。

しん、と静まりかえったテーブル。互いの顔が強ば^{こわ}ってる。何やってるんだろう、私たち。そう思ったら、彼の方が先にふっと表情を和らげた。

「あ、……いや、気を悪くされたのなら謝ります。申し訳ありませんでした」

そしてまた、あっさりと頭を下げてくれちゃうんだよな。こういう時に無理に取り繕^{つくろ}ったり、自分に都合がいいように話をすり替える人だっていくらでもいるのに。

「宮内さんはとても話しやすい方なので、つつい^{つつ}い無駄話がすぎてしまいました。すみません、こちらの用件から先にお伝えするべきだったのに」

申し訳なさそうにそう告げられてしまうと、すぐに許ゆるしてしまいたくなるから不思議。この人には私の怒りを吸い取ってしまう不思議な力があるのかも知れない。

「宮内さん、あなたにお願いがあります」

そこで突然、私たちを取り巻いていた空気が、さあっと緊張感を帯びる。

一点の曇りもない誠実そのものな瞳の色。それが私を真っ直ぐに捉えている。何なのこれ、どうなっちゃうの!? いくら抑えようとしても胸の高鳴りが止まらない。

「僕に、恋愛の仕方を教えてくれませんか?」

「――は?」

一呼吸置いてから、半開きの口元のままで聞き返していた。そんな私に彼は、当然のように言い放った。

「僕には婚約者がいます。彼女と幸せになる方法を、宮内さんにぜひ伝授して欲しいんです」

テーブルを挟んで無言で見つめ合う私たちの下に、デザートプレートが運ばれてきた。

都内にビルや店舗をいくつも所有している大地主。月々支払われる家賃収入で生計を立てているなんて、しがないサラリーマン家庭で育った私にはまるで想像もできないよ

うな話だ。

そんな彼には運転手つきの車だけではなく、将来を誓い合った婚約者まで存在した。まあ、それも……ちよつと考えたら予想がつきそうな話かも。

真剣な瞳で見つめられて、もしやこれから伝えられるのは愛の告白!? とか一瞬でも考えてしまった自分が情けなさすぎる。

「彼女さんと幸せになる方法、ですか」

放心状態のままデザートを食べ終えたから、残念ながらお味の方はよく覚えてない。舌の上でとろけていくアイスクリームは間違いなく絶品だったはずなのに、すごくもつたないことをした。

「そのようなこと、急に言われましても……」

慌てて言葉を濁した私の頭は混乱しまくり。

小さなカップに注がれた薫^{かお}り高いコーヒー。いつもならノンシュガーなんだけど、今はちよつとだけお砂糖が使いたい気分だ。

「いえ、ここはどうしても宮内さんにお願^{めいご}いしたいんです。出会いのカリスマと呼ばれるオーナーの姪御さんなら、絶対の信用が持てますから」

イケメンのお金持ちは、考え方までもが私とはまったく別次元の人だった。

こんな話に乗っては駄目、だって絶対に間違ってるもの。

そりゃ、今はサービス産業が真っ盛りのご時世だよ？ 恋愛にしたって、ハウツー本から雑誌の特集記事までいろんな情報がばんばん出てる。まるで「この通りにすればすべて上手く行く！」って言わんばかりの強気の発言もあったりして。

でもさ、こういうことを最初から他人任せにしちゃ駄目だと思う。うちの結婚相談所だって相手選びにはいろいろ力を貸すけど、出会ったふたりがそのあと上手く行くかどうかは、本人たちの努力次第だ。

それに、お互いが歩み寄っていくという過程が一番オイシイ部分でしょう？ そこをすっ飛ばしてどうするの。

「は、はあ……」

「日頃から出会いをプロデュースするお仕事をなさっている宮内さんなら、何かいいアドバイスがいただけるかと思ったのですが」

何なのかなあ、この人。不思議すぎて、私の価値観ではとても理解できない。そう思いつつも、断るきっかけを探せないでいるんだから駄目だな。

だって、よくよく考えたら須藤さんってうちのお店にとっては「大家さん」なんだよね。あまり邪険にするのもどうかたと迷い始めると、なかなか覚悟が決められなくて。

「ええと、……しばらく考えさせてはいただけませんか？」

それにここで貸しを作っておけば、将来家賃交渉とかで有利になるかも知れないわ。

にわかに打算的な考え方に傾いてしまった自分が悲しい。

「そうですか。それではぜひ、前向きな回答をお待ちしています」

その瞬間に私に向けられたのは、親愛に満ち溢れた素敵すぎる笑顔。この表情だけで、ほとんどの女性は落ちると思うんだけど、当の本人はそのことにまったく気づいていないみたい。

3

翌日、普段よりも三十分早く出社すると、佐藤チーフはすでに自分のデスクについて作業を開始していた。もちろん制服に着替え終え、身だしなみもばっちり。

さすが、常に時間に余裕を持つて行動することで知られている佐藤チーフ。いつも開店時間ギリギリに駆け込んでくる叔母さんとはまったく違うわ。明日からはもう三十分早く家を出ようと、私は強く決意した。

「午前中に表のドアの修理ですって？ それなら面談には一番奥のスペースを使いましょう。朝イチのお客様って支店長が担当していた方だったわよね。今日は私が代理で引き受けるから、麻衣ちゃんはデータ入力をお願い」

ひさびさのふたり体制はすごく楽。本当だったら、今朝からは叔母さんが復帰してこ
うなるはずだったんだ。ここ数日はスケジュールをゆったりめにしてもらってたし、大
きなイベントもなかったからどうにかやってこられた。でも、これ以上は無理。

結婚相談所って、内情を知らない人には謎なスペースだね。でもやっていることは、
近所の「お見合いおばちゃん」の延長、それが少し大がかりになってきちんとシステム
化されているだけなの。

会員になるには、入会金と所定の月額利用料を納めてもらう。そうすると、「ローズ
マリー」全店舗共通の会員データに情報が登録されて、それが社内を設置されている端
末で自由に閲覧できる。

そこで希望にあった会員を見つけたら、会員に割り当てられたメールアドレスを利用
して連絡を取り合ったり、直接の面会を申し入れたり。もしも自分でアポを取るのが恥
ずかしいって方は、こちらで代行も承っている。

一対一の出会いのほかにも、ひと月に十回ほど開催される合同パーティがあつて、そ
こで大勢の会員の中からお目当てのひとりを見つけることも可能。もちろん、会員の方
とは折に触れて面談を行って、それぞれのご希望にあったプランを提供してる。

入会金と月額の利用料を合計すると、年間では結構なお値段になる。それでも合理的
に出会いを求める人は大勢いるみたいで、毎月新たに入会なさる方がウチの店舗だけ

も十人は下らない。全店舗を合計すると百人以上にのぼって、「ローズマリー」全体では常時何千人規模の会員を抱えてる。それだけ多くの人が出会いを求めているってことね。

それぞれの会員さんと個別に面談しているとしみじみ思うわ。今の人たちってみんな忙しすぎる。仕事もちろん、遊びやその他もろもろの付き合いもあって、個人的な恋愛にそれほど多くの時間と労力を費やせないっていうのが本音みたい。

まあ、思い起こしてみれば私自身もそうだったもんな。前の会社に入社した時もどんな素敵なオフィスラブが待っているのかとわくわくしたけど、実際はドラマのような物語が始まることはなかった。そうしているうちにリストラだもん、ホントに悲しい人生だわ。

「おはようございます！ 自動ドアの修理に参りました」

三人分の修正データを打ち込んだところで、元気のいい声が入り口から聞こえてくる。見るとそこには作業服を着込んだ若者がふたり、ここがどういふ場所かわかっているらしく興味津々で中を覗き込んでいた。

「あ、そちらの左側のドアです。よろしくお願いします」

入力用の端末をオフにして、ロックをかけたあと席を立つ。住所氏名といった個人情報

報は載せていないデータではあるけど、やはり管理は嚴重にしないと。このことは最初に特に厳しく言われてる。

そろそろ面談の会員さんが到着する時間、業者さんの分も合わせてコーヒーを多めに落としても大丈夫かな？

「おはようございます、ご苦勞様です」

ドリップ用に挽いたコーヒ^ひーの粉をスプーンで計っていると、表からもうひとりの声がした。顔を上げると、……あ、須藤さんだ。

「おはようございます」

ぱちつと目があった瞬間に、私は小さく頭を下げた。昨日とは違う、でもやっぱりひとめ見ただけで上質の素材で作られたということがわかるスーツを着てる。もちろん、足下の靴もピカピカに磨かれていて。

彼は作業をしている業者の人たちと軽く言葉を交わしたあと、こちらに進んできた。

「昨日はお疲れ様でした。お帰りが遅くなっちゃいましたが大丈夫でしたか？」
心持ち小声になった彼が、すまなそうにそう切り出す。

「あ、いえ。こちらこそ、ご馳走様でした」

奥のテーブルには接客中の佐藤チーフがいるしね、営業時間内でもあるから私語は極力慎まなくちゃ。

「ただ、彼が言うことはもったもなの。」

ゆったりした食事を楽しみつつおしゃべりに花を咲かせていたら、いつの間にかとても遅い時間になっていた。ふたりして時計を確認して、びっくりしちゃった。もちろん帰りもアパートの前まで車を回してもらって、すぐく遠回りをさせてしまったと思う。

「修理、すぐに終わりそうですよ。完全に壊れる前だったから、微調整でどうにかなるようです。大事にならなくてよかったですね」

「そうですか、さっそく手配してくださったお陰です。ありがとうございました」
一度頭を深く下げてから、彼の方に再び向き直る。

「よろしかったら、コーヒーをいかがですか？　ちょうど淹れたところですから」
私の言葉に、彼は静かに首を横に振った。

「いえ、これから打ち合わせがあつて、すぐに行かなくてはならないんです」

そうか、やっぱり忙しい人なんだな。ま、このまま居座られたら業務に差し支えるし、適当なところで切り上げてくれた方がありがたい。

「……その」

そこで会話は終了したんだと思つた。だけど、私が元通りに席について資料を広げても、まだ須藤さんがそこに立っている。

「宮内さん、今日のランチ休憩はいつ頃ですか？」

何でそんなことを訊ねるんだろう、よくわからない。

「ええと……午後から忙しくなるので、今日は少し早めに。十一時半頃になると思いいます」

すると彼は腕の時計にちらつと目をやって、少し何かを考えてるみたいだった。

「では、その頃に下のエントランスでお待ちしています。少々お時間をいただけますか？」
約束の時間が迫っていたのだろう。彼はそれだけ言い残すと、慌てて立ち去ってしまった。

これって、やっぱり昨夜の返事を聞きたいってことなんだろう。困ったな、こんなに早く回答を求められるとは思ってなかったから、まだ何も考えてないのに。

躊躇^{ためら}いつつ言われた通りにエントランスに降り立つと、出かける支度を終えた彼が待っていた。今日は少し肌寒いから、その腕には薄手のコートがある。

「すみません、午後からほかに回るようになってまして。さあ、急ぎましょうか」

ここは日中も人の出入りがすごく多い場所。通りすがりの人がすべてハツとして振り向くほどの素敵な彼に突然呼び止められたら、周囲の視線が気になって気になって仕方ない。

「そ、そうなんですか……」

仕事だから、私の方は制服のまま。「ローズマリー」の所員です、って看板を背負って歩いているようなものなのよ。ふたり並んだら、何ともちぐはぐな組み合わせだと思ふ。

「少し歩いたところに喫茶店がありましたね、そこでよろしいですか」

あ、よかった。今日は黒塗りの車で移動じゃないんだ。真っ昼間からアレをやられたら、ちよつとした衝撃だったかも知れない。

街はそろそろ日中でも上着が手放せなくなる頃。だけど、空気がサラサラしていてもすごいしやすい季節だ。街路樹の葉っぱも綺麗に色づき始めてる。ありきたりの風景も、彼と並んで歩くとすごく輝いて見えるから不思議。

歩きながら、彼はゆっくりとした口調で話し出した。

「今朝、彼女をデートに誘ってみたんです。今度の日曜日にしました」

やっぱり、昨日の話の続きか。……と言うか、経過報告？ そんなのいちいち私にしてくれなくてもいいと思うけど。

ちよつとトゲトゲしてしまう気持ち在必死で吞み込んでいると、対する彼の方は期待に満ちた瞳で私を見つめてくる。

「話が具体的に動き出したので、ここはすぐにでも宮内さんに秘策を伝授していただくなくてはと思いますて」

えーっ、またコレだよ。いい加減にして欲しいよなあ、まったく。

「秘策も何も、ご自分でいつもなさっているようにすればいいじゃないですか？」

多少苛いらついた声になってしまったことは許ゆるして欲しい。会員さんとのやりとりならば、もうちょっとオブラートに包んだ言い方にするんだけど、今回は歯止めがきかなかった。どうせ、海外にいる頃は女性を取っ替え引っ替えとか楽しいこととしてたんでしょう。ホント、黙ってたって女性がわらわらと集まってきそうなタイプだもの。それを今更、カマトトぶらないでよ。

あ、いや、カマトトって男性相手にも使う言葉なのかな……？

「僕がいつもしているように……ですか？」

でも、彼は私の言葉にわかりやすく困った顔になる。それを見て、さらにイラつときてしまう。

「そうですね、昨日の晩みたいに女性と一緒に食事をしたり、須藤さんは今までだって普通になさっていたでしょう？」

そして、それ以上のことだって当然——という言葉はさすがに自主規制。やばやば、もうちょっとで口から飛び出しちゃうところだったよ。うら若き乙女が、公衆の面前でそんな発言をするのはいただけない。

「そんな……」

彼は信じられないという表情で私を見ると、首を何度も横に振った。

「仮にも婚約者がいる身で、ほかの女性と付き合うなんて許されることはありません。まったくもって倫理に反することです」

——何、それ。

「ええと、でも、昨夜は私と食事をしてますよ」

「宮内さんは特別です、彼女と幸せになる方法を僕にいろいろ教えてくださる方なのですから。いわば、先生のような存在です」

今度は私の方が呆氣にとられる番だった。何でいきなり真顔でお叱りを受けなくちゃならないの、わけわかんないよ。

冗談のつもりなのかとも考えたけど、本人はいたって真面目な感じだし。

「その……もしやとは思いますが。まさか、今までいわゆる……一対一のデートのご経験がないとか？ 彼女さんとも今回が初めてとか、そんなのあり得ませんよね」

いや、絶対に違うとは思ったんだよ。でも、何だか悪い予感がしたし、そうだとしたら、今までの話のつじつまがすべて上手く合うような気もする。

「ええ、実はその『もしや』です」

これには私の方もびっくり。えーっ、嘘っ。その歳で、そのルックスで、女性と一対一で出かけたことがないなんて……そんなの絶対に変。

「……あ、もちろん仕事上の付き合いでご一緒した方は幾人かいますよ。仕方ないんです、女性だからと断ったりしたら『男女で扱いを変えている』ということになって、その行為をセクハラで訴えられかねませんからね」

私の驚きが^{おわきよう}大仰なものに見えたのだろう、彼は慌ててそう付け足す。でも、そんなことは言っても言われなくても大差なかった。

「そう……なんですか」

こちらはもう、力なくそれだけ答えるのがやっと。まだ百パーセント彼の言葉を信じたわけじゃないけど、やっぱり嘘ついているようには見えないし。うーん、厄介な人とお知り合いになっちゃったなあ。

「彼女を悲しませることなんて、僕にはできません。そんなこと、今まで一度も考えたことはありませんでした」

その挙げ句が「彼女と幸せになる方法を教えてください」？

考えることが極端なんだよなあ、この人って。仕事とかバリバリできそうな感じなんだけど、そこで培った^{つちか}ノウハウを恋愛に活かそうとは思わないのかな。

「ところでその彼女さんとは、普段どのようなお付き合いをなさってるんですか？ もちろん、その方も須藤さんとの結婚に同意されているんですよね」

これ以上深入りするのはやめようと思いつつ、つついとお節介を焼いてしまう。やっ

ぱり、叔母さんの血筋？ ううん、須藤さんが必死すぎるから可哀想になつてしまうんだ。

「ええ、直接そのことを訊ねたことはないのですが、同意してくれているはずです。ふたりの結婚は子供の頃から決まっていたことですし、何度か両親に連れられて互いの家を訪問したこともあります」

へー、ということとは「親同士が決めた婚約者」？ さすが、お金持ち。やることこつちの想像を遙かに超えてるわ。やっぱり彼女も運転手つきの自分専用車を持っている人なのかな。

「ただ、年が離れていることもあつて、その頃は会話らしい会話もありませんでした。僕が大学を出てアメリカに発つ時になつても、彼女はまだ高校生でしたし……だから、まだまだその頃の印象が根強くて、自分でも困っているんです」

彼より六歳年下の彼女は、今年の春大学を卒業したばかり。今は自宅で花嫁修業をしている身の上だと言う。そこまでお膳立てされていて、上手くいかなと思う方がおかしいと思う。

「とても可愛らしくて、ずっと守ってあげたい女性です」

そんなに目をキラキラさせて力説しなくても。何だかこっちはすごく虚しくなってるんですけど。

「なら、……それで十分だと思います」

これは私の勝手な想像なんだけど、その六歳年下の婚約者さんは須藤さんのことがすごく好きだと思う。だからその気持ちをしっかりと受けとめてあげることができれば、それでいいんじゃないかな。

「やはり、……宮内さんもおっしやもそう仰いますか」

そんなにしょんぼりすることないのに、不思議な人だなと思う。

何だろう、なまじ頭のいい人だから、どうでもいいことを堅苦しく考えてしまうんだろうか。世の中には「ま、この辺で妥協するか」とか適当に結婚しちゃうカップルだっていると思うのに。それでもみんな結構幸せに暮らしてたりするし……だから大丈夫だよ。

「あ、もちろん。私個人としては思いつきり恋愛して、その上で生涯のパートナーを決定するのが最高かと思いますけど」

自分までが計算的な考えに引つ張られそうになって、そこで慌てて踏みとどまった。駄目よ駄目、ほかの人はそれでよくても、私はそうじゃないもの。

「そうですか、宮内さんにはそんな素敵な相手がいらっしゃるんですね。羨ましいです」
うらや

何、その見当違いなコメントは。

ここで「はい、その通りです!」と見栄を切れたら最高だったんだけど。変なところで正直者な私はそれができないんだな。

「あ、いえ……その。そんな相手を、目下募集もっか中ってことで」

ゴールイン直前の相手がいる人の前で、こんな情けない発言をしなくてはならないのが悲しい。でも仕方ないわ、私の恋愛観にぴったりと見合う相手がなかなか現れてくれないのがいけないのよ。

「本当に楽しい方ですね、宮内さんは」

またまた不思議な反応。これじゃ、褒められているんだかけなされているんだかわからないわ。まあ、須藤さんのことだから、きっと素直に感想を述べてくれているのだと信じた。

「須藤さんは当日、彼女さんとお会いになるのが嬉しくないんですか？」

ほら、こうやって訊ねれば首を横に振るくせに。何だろうなあって感じた。

結局のところ、相思相愛なんですよ。それで何を悩む必要があるんだろう。世の中には「出会い」がなくて困っている人だっただくさんいるのに。私も間違いなくそのひとりであることを、この人は絶対にわかってないな。

「だったら、そのお気持ちを彼女さんにお伝えすればいいんです。私なら、それだけで舞い上がっちゃうくらい嬉しいですよ」

うーん、何だか想像できちゃうな。会いたくて会いたくて待ちきれないほどだった大好きな彼が、自分と同じ気持ちで待ち合わせの場所に現れてくれたら、もうそれだけで

胸がいっぱいになっちゃう。

「でも……その先どうすれば」

えー、そんなこと、急に聞かれても答えられるわけじゃない。

私が一瞬逃げ腰になったのがわかったのだろう、それでも彼はさらにたたみかけるように言葉を重ねてくる。

「すみません、でも宮内さん以外に相談できる人がなくて」

いや、私になんて頼られても困るから！

「そ、そうは言われても、ですね……」

曖昧な返答をしつつ、どうにかして彼の質問から逃れる方法を探している私。もうつ、マジで泣きたい気分だよ！

そりゃ、本気で悩んでいる相手を突き放すのは気が引ける。でも仕方ないよ、こっただって恋愛のエキスパートってわけじゃないんだし。思いつきで適当なことをでっち上げるのもよくないでしょう。

この仕事も大変だな、いきなり「プロ」とか言われてこんな質問を受けたりするんだから。これからたくさん勉強することがありそうだ。

「……あ、時間」

一緒にランチを、って話だったのに。目的地に向かうまでの道の途中で、思いがけず

話し込んでしまった。携帯画面を確認した私の声に、彼もハツとして自分の時計を見る。

「本当だ、いつの間にこんな時間に」

いい大人がふたりして、路上でわたわた。これって昨夜とまったく同じパターン。まったく学習していないって感じだ。しかも話し合いはあまりにも中途半端なままだし。でもっ、もう戻らないと！

「じゃあ、私はこれで失礼します。午後のお仕事も、頑張ってくださいね」

やーっ、これじゃコンビニに寄る時間もない！ コーヒーにダイエツトシュガーをたっぷり入れて、次の休憩まで持ちこたえなくちゃ。

「あ のっ、宮内さん」

マジで一分一秒を争う感じだったんだけど、悲しげな声で呼び止められるとついつい足が止まっちゃう。仮にもビルのオーナーだと思つと、邪険にできない現金な私。

「もしも宮内さんだったら、どんな一日をすごしたいと思ひますか？ 参考までにお聞かせいただけると嬉しいのですが」

もうっ、こっちは本気で時間がないの。須藤さんと違つて、運転手つきの車もやつてこないんだから、自分の足で戻らなくちゃいけないんだよ。

「あつ、あの私、明日の水曜日は定休ですから。午前中は片付ける仕事があるので出勤しますが、そのあとでしたらお話できます。はい、ここにご都合のいい時間と場所をメ

ールしてください！」

慌てて取り出した名刺を彼に押しつけると、私は人目を気にすることもなく仕事場へとひた走った。

『表通り公園に午後一時でよろしいでしょうか』

須藤です、という件名のメールを開いたら、あまりに短い本文。もちろん、絵文字とかは一切なし。

「……何だか、調子が狂いっぱなしなんだよな」

それでも、待ち合わせ場所がビルのエントランスじゃなくてよかったとホッとする。毎度毎度あの場所呼び止められていたら、いまに噂になっちゃいそう。たくさんさんのテナントが入っているオフィスビルだから、どこで誰の目が光っているかわからないよ。

見た目は完璧、いわゆる「三高」も楽々クリア。だけど恋愛初心者、さらに彼女持ち。転職早々、不思議な人とお知り合いになってしまった私。訳がわからないうちに向このペースに乗せられて、いつの間にかおかしな関係ができて上がっていた。

ま、ここはもう腹をくくれないだろう。それが丸一日かけて私が出した答えだった。いつまでも迷ってたって仕方ない、彼の他人任せな態度には多少疑問は残るけど、頼ら